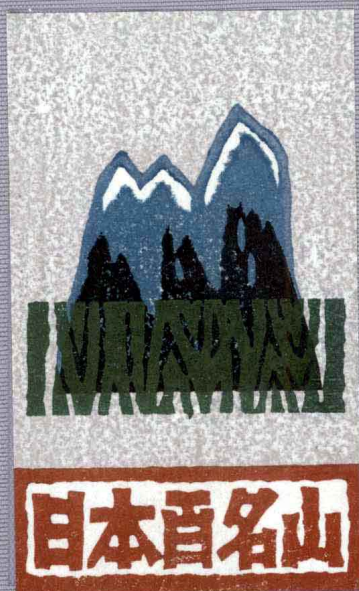




日本百名山

深田久弥

新潮社版

1964年



Printed in Japan. © K. Fukada

—1964—

日本百名山

★

著者 深田久弥

昭和39年7月10日印刷

昭和39年7月20日発行

定価 870円

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町71

電話(260)1111 振替東京808

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 新宿 加藤製本所

〈落丁・乱丁本はお取替えいたします〉

日本百名山
目次

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
鳥海山	早池峰	岩手山	八幡平	八甲田山	岩木山	後方羊蹄山	幌尻岳	十勝岳	トムラウシ	大雪山	阿寒岳	斜里岳	羅臼岳	利尻岳
四二	三九	三六	三四	三三	三〇	二八	二六	二四	二三	一九	一六	一四	一二	一〇
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
谷川岳	至仏山	燧岳	巻機山	平ヶ岳	魚沼駒ヶ岳	那須岳	会津駒ヶ岳	磐梯山	安達太良山	吾妻山	飯豊山	蔵王山	朝日岳	月山
七四	七二	七〇	六八	六六	六四	六二	六〇	五七	五四	五二	五〇	四八	四六	四四

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
白馬岳	筑波山	浅間山	四阿山	草津白根山	赤城山	武尊山	皇海山	奥白根山	男体山	高妻山	火打山	妙高山	苗場山	雨飾山
一〇四	一〇二	一〇〇	九八	九六	九四	九二	九〇	八八	八六	八四	八二	八〇	七八	七六
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
御岳	乗鞍岳	焼岳	笠ヶ岳	常念岳	穂高岳	槍ヶ岳	鷲羽岳	黒岳	黒部五郎岳	薬師岳	立山	剣岳	鹿島槍岳	五竜岳
一三四	一三二	一三〇	一二八	一二六	一二四	一二三	一二〇	一一八	一二六	一二四	一二二	一一〇	一〇八	一〇六

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
空木岳	木曾駒ヶ岳	天城山	富士山	丹沢山	大菩薩嶺	瑞牆山	金峰山	甲武信岳	雲取山	両神山	八ヶ岳	蓼科山	霧ヶ峰	美ヶ原
一六四	一六二	一六〇	一五八	一五六	一五四	一五二	一五〇	一四八	一四六	一四四	一四二	一四〇	一三八	一三六
90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
大台ヶ原山	伊吹山	荒島岳	白山	光岳	聖岳	赤石岳	悪沢岳	塩見岳	間ノ岳	北岳	鳳凰山	仙丈岳	甲斐駒ヶ岳	恵那山
一九四	一九二	一九〇	一八八	一八六	一八四	一八二	一八〇	一七八	一七六	一七四	一七二	一七〇	一六八	一六六

	91	大峰山	一九六
	92	大山	一九八
	93	剣山	二〇〇
	94	石鎚山	二〇二
	95	九重山	二〇四
	96	祖母山	二〇六
	97	阿蘇山	二〇八
	98	霧島山	二一〇
	99	開聞岳	二一二
	100	宮ノ浦岳	二二四
後記	★		二二七

表紙版画 大谷 一良

扉カッ ト 山川 勇一郎

題字・見返し 神野 八左衛門

写 真

外箱(北アルプス) 風見 武秀

口絵(穂 高 色) 田 淵 行 男

口絵(聖 色) 船 越 好 文

口絵(赤 石 色) 船 越 好 文

口絵(霧ヶ峰) 船 越 好 文

◆本文の写真◆

風見 武秀 桜井 昭吉

船越 好文 大場 嗣

清水 武甲 橋本 誠二

田淵 行男 中村 謙

小島 一郎 山 高 登

小島 啓佑 内 田 亮

瓜生 卓造 藤島 敏男

加藤 数功 小野 尚俊

出口 一重 横山 厚夫

藤 島 玄 馬場 勝嘉

山中 三男 中馬 隆二郎

奥田 英一郎 村井 正衛

山口 耀久 石井 重胤

中村 朋弘

◆地図作成◆

日本百名山



1 利尻岳 (二七一八米)

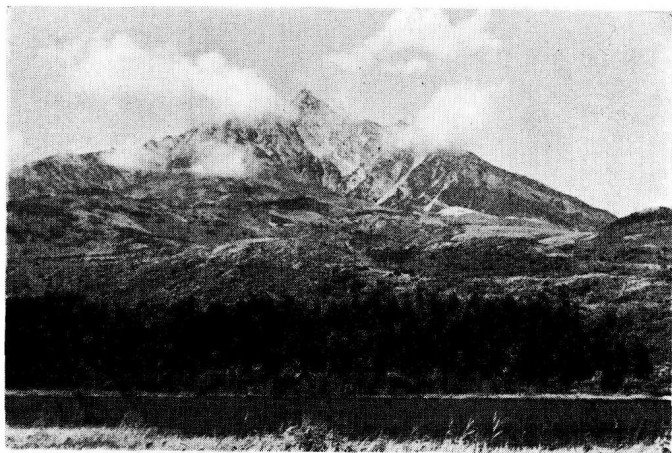
礼文島から眺めた夕方の利尻岳の美しく烈しい姿を、私は忘れることが出来ない。海一つ距ててそれは立っていた。利尻富士と呼ばれる整った形よりも、むしろ鋭い岩のそそり立つ形で、それは立っていた。岩は落日で黄金色に染められていた。

島全体が一つの山を形成し、しかもその高さが千七百米もあるような山は、日本には利尻岳以外にはない。九州の南の海にある屋久島もやはり全島が山で、二千米に近い標高を持っているけれど、それは八重山と呼ばれているように幾つもの峰が群立しているのであって、利尻岳のように島全体が一つの頂点に引きしぼられて天に向ってはいない。こんなみごとな海上の山は利尻岳だけである。

この立派な山が、わが国山岳書の古典である志賀重昂の『日本風景論』にも高頭式の『日本山岳志』にも出ていないことを、私は大へん遺憾に思うが、それだけこの山の世に知られることがおそかったのかもしれない。

私の眼にした最初の利尻岳紀行は、『山岳』第一年二号に載った牧野富太郎氏のそれである。明治三十六年(一九〇三年)八月のことで、この植物学者の一行は鴛泊から登った。ほとんど道らしくもない道を辿って、山中に二泊している。頂上には木造の小さな祠があったというから、土地の人は、すでに登っていたのであろう。紀行にはカタカナの植物の名がたくさん出てくる通り、北日本で最も種類に富み、リシリという文字が頭についた名の植物だけでも、十八種に及ぶそうである。

利尻は噴火によって出来た円形の島で、中央にそびえた利尻岳が四周海ぎわまで裾を引いている。従って人の住んでいるのは海ぎわだけで、島を一周するバスが町や村をつないでいる。おもな町は、杵形、鴛泊、鬼脇、仙法師の四つで、どこからも、利尻岳のよく見えることは勿論である。大体富士型の山であるが、仰ぐ方面によって幾らか形が変わる。鬼脇と仙法師の中間の三日月沼あたりから見た姿が一番尖鋭で、それはまるで空を刺すような鋭い三角錐である。



北海道本島と遮断された海上の山だけあって、此処には蛇や蝮がないという。北海道の山に付きものの熊もいない。かつて対岸の天塩に山火事があった時、難を逃れてこの島まで泳ぎ渡ってきた熊が一時棲みついたが、いつの間にか見えなくなったそうである。多分また古巣へ泳ぎ帰ったのであろう。

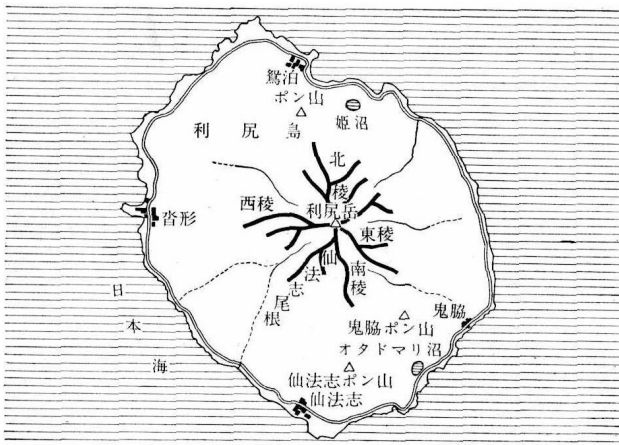
鴛泊、鬼脇、沓形からそれぞれ頂上へ登山路が通じている。一番古いのは牧野富太郎氏らの登った鴛泊道で、行程は長いが楽なので、今でも一番多く利用されている。反対側の鬼脇道は、距離が短く変化に富んでいるが、頂上近くで瘡けた岩尾根を辿る危険を冒さねばならない。

私達は沓形から登った。この道は一番新しく、道のりも長い。ややだらだらした裾野を登って森林帯を出ると、見晴らしがよくなる。眼の下の方の海岸に打ち寄せる白波がレースで縁取ったようにはつきり見え、その先に細長い礼文島が浮んでいる。もうそのあたりは匏松の敷きつめた高山帯で、ゴゼンタチバナの赤い実が道傍を綴っていた。

暴風一過後だったので大気は澄んでいたが、風は強く絶えずゴーゴー鳴っていた。下の方は鮮やかに晴れているに拘わらず、頂上にかかった雲がなかなか取れない。海洋の気流が頂上にぶつかって、そこで絶えず湧かせている雲だから、これはあきらめるより他はない。

出発点が海拔ゼロ米であるから、千七百米を越える霧の頂上まで、ゆっくり登って八時間もかかった。じつと立っておられないくらい風が強かったが、その強い風が瞬時霧を追い払って、眼の前にみごとな眺めを見せてくれた。それはローソク岩と呼ばれる大岩柱で、地から生えた牙のように突っ立っていた。それが流れる霧の間に隠見するので、よくいに素晴らしいものに見えた。帰途は鬼脇へ下る予定であったが、この強風中、岩の瘡尾根は危険だということで、鴛泊道をとることにした。この下りは道はやさしいが実に長かった。鴛泊の町に入った時はもう暗くなっていた。

翌日の午後、私達は利尻島を離れた。きれいに晴れた秋空であった。稚内へ向って船が島から遠ざかるにつれて、それはもう一つの陸地ではなく、一つの山になった。海の上に大きく浮んだ山であった。左右に伸び伸びと稜線を引いた美しい山であった。利尻島はそのまま利尻岳であった。それがいよいよ遠くなり、稚内の陸地が近づいて来た。やがて山も消え、その山の形に白い雲がひと所海面に湧き上っているのが、利尻岳の最後の面影であった。



2 羅 白 岳 (二六六一米)

千島を失った今日、日本の東北端は知床しねとになった。オホーツク海に向って長く差し出したこの半島は、荒涼とした僻地に憧れる人たちにまだ夢を残している。その知床の代表として羅白岳らくはくを挙げるのは、決して不当ではあるまい。

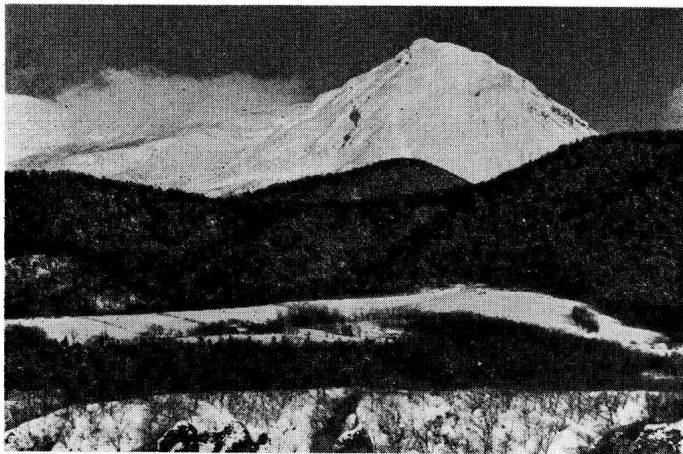
知床半島というのは細長い山脈の突出であって、殆んど平地がない。海のきわまで山が迫っている。その山脈のおもな峰々を半島の付け根の方から数えて行くと、海別岳うみべつ、遠音別岳おんねづ、羅白岳、硫黄山、知床岳などがあり、羅白岳が最も高い。全体が火山脈であるが、殆んどが死火山であって、現在活動しているのは硫黄山だけである。

知床の山々が登山の対象になりだしたのはそう古いことではない。北海道の中でもこの僻遠の山が一番あとまで取り残された。初め北大の山好きの学生たちによって登られたが、それが多くは積雪期であつたのは、夏よりも冬の方が歩きよかつたからであらう。というのはこの山脈は凄^{ひど}い匍松に覆われているからである。海別岳や羅白岳以外の山へ行こうとすると、匍松との悪戦苦闘を覚悟せねばならない。

羅白岳が知床富士とも呼ばれるのは、羅白村からすぐ眼前に形のよい円峰のそびえているのが見えるからだらう。村は海抜にたにあるし、そこから直線距離八軒で、懸値なしの一六六一米を仰ぐのだから、山は大きく立派に違いない。違いないと言うのは、私は羅白岳に登るため天気を待って村の宿屋に四晩も過したが、ついに山を仰ぐことができなかったからだ。ただ写真で察しただけである。

羅白村は知床半島唯一の都会で、一本筋の通りには、映画館やパーマメント屋やバーまであつた。バーは漁期に集ってくる季節労働者のためのものらしい。村を出外れた所が港になっていて、むやみと鳥が群れていた。すぐ前の海には今はソヴェトのものとなつた国後島くなんじが大きく横たわっている。

羅白はアイヌ語で「鹿、熊などを捕ると必ずここに葬つたため、その臓腑や骨のあつた場所」



という意だそうで、ラは「動物の内臓物」、ウシは「たくさんある所」を意味するという。ラウシと呼ぶのが正しく、古い地図には良牛と書かれている。

村に誠諦寺というお寺があって、住職の西井誠諦師が羅臼岳の開発に力を入れておられる。村から登山道が開かれたのも西井さんなどの尽力であって、それは昭和二十九年（一九五四年）のことであった。

それまでは羅臼岳へ志す人は、半島の北岸の宇登呂から岩尾別を経て登った。岩尾別からイワウベツ川を溯ると温泉があって、そこが登山のよい足場になっていた。距離からいうと岩尾別の方が頂上に近いので、この方の登山道が先に開けたのであろう。

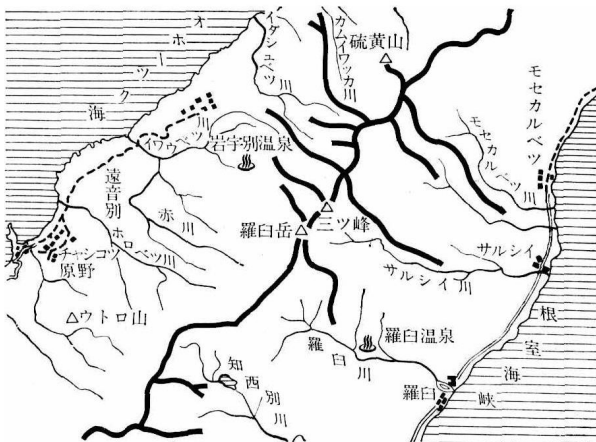
私は羅臼から登った。村から羅臼川に沿って一時間ほど行くと、羅臼温泉がある。村営の宿が建っていたが、食糧・寝具の設備はなかった。そこから山にかかる。針葉樹林の尾根の腹を捲いて、一たん硫黄で黄いろくなった沢へ下り、そこから屏風岩と呼ばれる長い大岩壁の裾に沿って急坂を登ると、ラウス平という大きな斜面に出る。

ラウス平は一面匍松の褥で、その豊かな拡がりのはのんびりして美しい。季節にはお花畑になる。平の向うには三ッ峰が立ち、三ッ峰から更に北すれば、サシルイ、オツカバゲを経て、活火山の硫黄山まで近年道が開かれた。硫黄山の外輪をなす岩壁は壮絶な眺めだそうである。

羅臼岳の頂上へ私は立ったが、霧に包まれて何にも見えなかった。ただオホーツク側から巻きあげてくるすさまじい風の音を聞くだけであった。

だから羅臼山岳会で書かれた記事によって、その展望を察することにしよう。まず東を望むと足下に国後島が浮び、その向うに太平洋が拡がって、遠く千島の列島が見える。南に向くと、知西別川上流の分水嶺あたりに周囲五軒に及ぶ無名湖（羅臼湖と呼ぶ人もある）があって、その囲りに大小七つの沼が点在している。この無名湖はクマザサや匍松のジャングルに妨げられて、今までそこまで達した人はごく僅かだそうである。西望すれば宇登呂港が眼下にあり、その先は茫々たるオホーツク海である。北は既に述べたように三ッ峰から硫黄山に向う背稜山脈が伸びている。

さいはての山として、北方的風貌をおびた山として、羅臼岳は私の記憶に深く残っている。近年羅臼温泉に立派な旅館が建ち、登山者も急激にふえてきたようである。



3 斜里岳 (二五四五米)

斜里岳^{しやり}はかねてからその姿を写真で見て、私の憧れの山の一つであったが、初めてその実景に接したのは昭和三十四年（一九五九年）八月下旬であった。釧路から網走に向う汽車に乗って、釧路と北見の国境を越え、斜里原野に下って行く途中、車窓の右側に大きく現われたのが斜里岳であった。その日は朝から曇天で、折々雨さえ混えた天気であったのに、斜里岳を最も美しく眺め得る所まで来た時、天は私たちのために快く晴れて、青空をバックに、左右にゆったり稜線を引いた、憧れの山の全容を見せてくれた。

しかし天が味方してくれたのはこのときりであった。その後摩周湖の西岸をバスで走った時、私の期待は、噂に聞く湖の神秘的な色よりも、湖の向う側に大きく控えている筈の斜里岳であったのに、一面の霧に包囲されて、湖も山もただ白一色に隠されていた。それから数日後、今度は根室標津^{しづ}から斜里町へ抜ける原始的な道路を乗客の少ないバスで通った。この道は斜里岳の東麓を辿っているので、私はそこから仰ぐ山容を楽しみにしていたのに、やはり曇天で、一瞬、ゆるやかに伸びた稜線の一部を垣間見たきりで終った。

北方の斜里町からの展望も得られなかった。私は空しく五万分の一の地図を拡げて、斜里岳が北に向って孔雀の尾のように展げている、目の荒い整齊な等高線を見ながら、この山の裾の大きさを想像するだけであった。

地図でも察しられるように、斜里岳は大きく根を張った山である。原住民のアイヌ人が素樸にオンネプリ（大山の意）と呼んで、神の如く尊崇したと伝えられているのも納得出来る。アイヌ語でオンネは「大」の意、ヌプリは「山」の意、それが詰まってオンネプリとなったものであろうか。

北海道の山は大ていそうであるように、斜里岳も登山の歴史は新しい。この美しいピラミッドの山に、土地の人さえ登ろうとする者がなかったが、昭和二年（一九二七年）五月、西北麓の三井農場からスキーで登ったのが最初とされている。この時は頂上近くまで行って引返したが、翌年三月、今度は東北麓の越川駅通からスキー登山を試みたパーティが遂に頂上に達した。そして同

